SERIES

ya

やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ

よくわかる 翻訳通訳学

鳥飼玖美子 編著

ミネルヴァ書房

やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ

よくわかる翻訳通訳学

鳥飼玖美子 編著

ミネルヴァ書房

はじめに

みなさんは，通訳というと，どのようなことを思い浮かべるでしょうか。オリンピックを東京に招致するための英語によるプレゼンテーションが日本語に同時通訳されたこと，首脳同志の間に立つ通訳者の姿などが浮かぶかもしれません。

翻訳はどうでしょうか。インターネットで検索して外国語の情報が出てくると，「このページを訳す」というところをクリックして機械翻訳された日本語を読むこともあるでしょう。海外の小説を日本語で読む時に，洋楽の歌詞カードを見る時に，翻訳だということを意識するかもしれません。

そう，翻訳も通訳も私たちにとって身近なことなのです。そして，みなさんの中には，映画やアニメの翻訳をやってみたい，東京オリンピックで通訳をしたいと夢見ている方がいるかもしれません。この本は，通訳や翻訳について知りたい，通訳者や翻訳者に興味がある，というみなさんの参考になるようにと考えてつくられました。

*　　*　　*

人間が人間であるのは，「言語」を有していることにあるといわれます。人間にとって思考の源である言語が，異なった言語間のコミュニケーションに使われる際に生じるのが，通訳であり翻訳という行為なのです。

英語では，翻訳と通訳を合わせてtranslationと呼びますが，両者を区別したい時には，書き言葉（書記言語）を扱う翻訳を指してtranslationといい，話し言葉（音声言語や手話言語）を対象にする通訳はinterpretingと呼びます。通訳は，「今，ここ」で訳す即時性が翻訳と違います。けれど「訳出という活動」である点では，翻訳も通訳も同じです。

翻訳や通訳を介してのコミュニケーションは紀元前から実践されてきたといわれますが，学問として研究対象になったのは，それほど古いことではありません。欧米ではtranslation studiesとして1970年代から盛んになっていますが，日本では1990年代に理論研究がはじまり，2000年になって学会が設立されました。当初は日本で通訳の研究がないことから通訳だけに焦点をあてていましたが，文学研究の一部として翻訳の研究は行われているものの，翻訳の理論研究が不十分であるのに気づき，翻訳も研究対象に含めました。翻訳通訳学が日本でも本格的にはじまったことになります。

「翻訳通訳学」を一言でいえば，「翻訳と通訳の現象と理論に関する研究」で

す。つまり「起点言語と目標言語との間に生起する訳出行為について，多角的かつ多層的に考察する学問」が翻訳通訳学です。主たる研究対象としては，原著者／原発言者が生み出すテクスト／メッセージと訳者が生み出す訳出物との関係，それらを取り巻く社会文化的コンテクストとの関連であるといえます。

*　　*　　*

翻訳通訳学で扱うテーマは学際的で多岐にわたりますが，本書では大学での通訳や翻訳に関する授業で使用することが可能なように，それらを具体的にわかりやすく説明し，本書で学んでいただくと翻訳通訳学の全体像が摑めるように工夫してあります。翻訳と通訳を専門にする研究者が協力し幅広い翻訳通訳学の領域を分担して執筆しており，最新の動向を含めているのが特徴です。本書を通して翻訳や通訳に対する関心が深まったら，ぜひ読んでいただきたい関連文献も，巻末に「おすすめ文献」として紹介しています。

本書は順番に読んで体系的に学ぶこともできますし，面白そうなところから拾い読みすることも可能ですので，翻訳と通訳という魅力的な世界を存分に味わっていただきたいと願います。

2013年10月　　編者　鳥飼玖美子

外国語の固有名詞については，可能な限り原音に近いカタカナ表記にしていますが，外国語の発音をカタカナで表すのは厳密には不可能です。したがって，一般的によく知られている表記を使っている場合もあります。たとえばVermeerのように地域によって発音が異なり，いずれを採用してもカタカナでは十分に原音通りとならない場合は，日本で馴染みのある「フェルメール」と，原音に近いとされる「フェアメーア」とを併記してあります。

中国語名については，中国大陸，台湾など，地域によって発音および発音表記が異なるため，カタカナによる表音ルビではなく，日本語音読みでのルビを付けています。

翻訳と通訳を学ぶにあたって必要な用語

翻訳・通訳について考える際に必要となる基本的な用語を紹介します。翻訳や通訳について学びはじめる前に，ここに取りあげる用語の意味をきちんと理解しておきましょう。

① テクスト（text）

形式もしくは意味のうえでつながりがある文の集合を指します。一つの文でも，口頭のメッセージでもテクストとなります。

「テキスト」と表記されることもありますが，本書では教科書のテキストと区別するため，「テクスト」とします。

② 起点と目標

翻訳や通訳にはつねに，二つのテクスト・言語・文化が関係します。Aという一つの言語から，Bという別の言語に訳すことが翻訳そして通訳であるためです。この二つの言語やテクスト，文化の呼び方が翻訳通訳学では決まっており，もとになるほうを「起点」，訳出する先を「目標」と呼びます。それぞれ英語の“source”と“target”を翻訳した語（訳語）です。

「起点」と「目標」を用い，もとになる言語を「起点言語」と呼び，訳す先の言語を「目標言語」と呼びます。同様に，翻訳のもとになるテクスト（一般に「原文」と呼ばれるもの）は「起点テクスト」，訳出されたテクストは「目標テクスト」と呼ばれます。さらに「起点文化」「目標文化」という用語は，翻訳や通訳されるもとの文化と訳出先の文化を指します。翻訳や通訳の研究は，言語使用者のもつ文化についての考察を含むことも多いため，この用語もよく使われます。

翻訳学や通訳学の研究書や論文などでは，日本語の文献を含め，次のような省略した表記を用いることがあります。「起点テクスト」を意味する場合，英語の“source text”を省略して“ST”とし，「目標テクスト」は“target text”を省略した“TT”とします。また「起点言語」は“SL”（source language），「目標言語」は“TL”（target language），「起点文化」は“SC”（source culture），「目標文化」は“TC”（target culture）のように表します。なお本書では基本的に省略せずに，「起点テクスト」のように記すこととします。

③ 訳出方法のいろいろ

訳すという行為に興味をもつ人ならば，今までに「直訳」や「意訳」という言葉を見聞きしたことがあるでしょう。直訳は稚拙であって，意訳が正しい訳し方だと信じ込んでいる方もいるかもしれません。直訳や意訳とは訳出法，つまり訳す方法のことです。正誤の判断をする前に，それぞれがどのような訳し方であるかしっかりと把握しましょう。こういった用語は使用者によって意味する訳出法が違うこともあります。ここでは基本的な意味を示しますが，それぞれ意味範囲の広い用語ですので，研究書など

に出てきた場合は使用者がどのような意図で用いているか注意し，みなさんが使用する場合は，どのような意味で用いるのか必ず定義してから用いましょう。

〈逐語訳〉

「逐語訳（word-for-word translation）」は起点テクストにある語を単位として，1語ずつ順に訳出する方法のことです。語を単位としテクストの形式を変えずに，目標言語の中で再現を試みる訳し方であり，起点テクストの語順や形式を重視した方法です。起点テクストの形を大事にするがゆえに，目標テクストの読者にとって理解しづらい文体になることもあります。この訳出法は，語順が似ている二つの言語の間での翻訳においては可能です。またキリスト教の聖書の翻訳では，行間翻訳といって，起点テクストの行と行の間に各単語の訳を書きこんでいく方法がとられることもあります。神の言葉である聖書を，原典になるべく近い状態で読みたい読者のための翻訳です。

〈直訳〉

「直訳（literal translation）」もまた，起点テクストの語順を再現しようとする訳出法ですが，逐語訳と違うのは2語以上を単位として順に訳すことも含まれる点です。1語ずつ語順を再現する逐語訳よりも，ゆるやかな訳出法を指すと考えればよいでしょう。2語以上を単位とするということは，3語以上の句や節などのまとまりごとの訳出も含まれます。ある訳出法を直訳とみなすかどうかはその都度，判断する者によって変わる可能性があります。直訳は逐語訳ほどではないにせよ，ぎこちない目標テクストになることがあるため，敬遠されることもあります。しかし芸術的なテクストなどでは表現の形が重要なことがあり，そういった場合には語順の再現を意識した直訳がふさわしいとされます。

〈意訳（意味対応訳）〉

「意訳」は「意味対応訳（sense-for-sense translation）」のことであり，形ではなく内容，つまりテクストに表された意味が起点・目標テクスト間で対応するように訳す方法です。この訳出法において重視されるのは内容の対応であって，起点テクストの語順や表現法の再現ではないため，目標言語の慣習から外れるような読みにくく不自然なテクストは産出されません。目標テクストの読みやすさを最重要視する場合には，この訳出法が選ばれることが多いでしょう。

〈自由訳〉

「自由訳（free translation）」は，さらに意味する範囲が広い用語です。「自由」を何に対する自由と捉えるかによって，意味される訳出法は大きく変わります。もし起点テクストの語順を維持することからの自由だと考えるのであれば，目標テクストにおいて起点テクストの形式を再現しない訳出法が自由訳となります。またもし，目標言語・文化の慣習から外れることを自由と呼ぶのであれば，目標テクストにおいて一般的ではない文体や表現を使用することが自由訳となります。そのような文体や表現を用いた理由が，起点テクストの語順を再現したことによる，つまり起点テクストに縛られるような訳であったとしても，自由訳と呼ばれ得るのです。

（齊藤美野）

もくじ

はじめに

翻訳と通訳を学ぶにあたって必要な用語

第1部 翻訳とは？　通訳とは？

1 翻訳通訳と異文化コミュニケーション …… 2
2 3種類の「翻訳」 …… 4
3 声と文字 …… 6
4 グローバリゼーションと翻訳 …… 8
5 グローバリゼーションと通訳 …… 10

第2部 翻訳と通訳の歴史

I 日本の翻訳通訳史

1 古代日本の通訳 …… 14
2 長崎通詞 …… 16
3 翻訳と明治の近代化①：近代科学の発展と翻訳 …… 18
4 翻訳と明治の近代化②：欧文脈 …… 20
5 東京裁判 …… 22
6 戦後外交と同時通訳 …… 24
7 アポロ宇宙中継と同時通訳 …… 26
8 日本の多言語化とコミュニティ通訳 …… 28

II 世界の通訳史

1 新大陸の通訳者 …… 30
2 中国の通訳 …… 32
3 会議通訳の誕生：パリ講和会議 …… 34
4 同時通訳の誕生：ニュルンベルク裁判 …… 36

III 世界の翻訳史

1 西欧翻訳史と聖書翻訳 …… 38
2 中国翻訳史と仏典翻訳 …… 40

第3部 社会における翻訳と通訳

IV 翻訳／通訳者の役割

1 翻訳者の役割 …… 44
2 通訳者の役割 …… 46
3 翻訳者・通訳者の倫理規定 …… 48
4 透明性，中立性 …… 50

V　通訳の種類

1　同時通訳／逐次通訳（ウィスパリング／サイト・トランスレーション）……52

2　対話通訳／手話通訳……54

VI　職業としての通訳

1　会議通訳……56

2　ビジネス通訳……58

3　放送通訳……60

4　司法通訳／法廷通訳……62

5　コミュニティ通訳(医療／教育)……64

6　通訳案内士（通訳ガイド）……66

VII　翻訳とテクノロジー

1　ローカリゼーション……68

2　翻訳メモリ……70

3　機械翻訳(プリ＆ポストエディット)……72

VIII　職業としての翻訳

1　文学翻訳……74

2　産業翻訳……76

3　法務／特許／医学／行政翻訳……78

4　コミュニティ翻訳／クラウドソーシング翻訳……80

5　視聴覚翻訳……82

6　翻訳者・通訳者団体……84

IX　メディアと翻訳通訳

1　ジャーナリズムとニュース翻訳……86

2　国際紛争と翻訳……88

3　紛争と通訳……90

4　ドキュメンタリー翻訳……92

X　教育

1　適性と資格……94

2　翻訳者コンピタンスと訓練……96

3　通訳者コンピタンスと訓練……98

4　高等教育機関での翻訳者・通訳者養成……100

5　外国語教育への応用①：文法訳読と翻訳……102

6　外国語教育への応用②：コミュニケーション能力育成と通訳訓練……104

7　外国語教育への応用③：シャドーイングと言語教育……106

第4部　翻訳通訳研究へのアプローチ

XI　翻訳学

1　翻訳学とは何か……110

2　西洋の古典的翻訳理論……112